

悪性さらさらによめがたし

こころは蛇蝎のごとくなり

修善も雑毒なるゆるぎに

虚仮の行とぞなづけたる

善いことをしたと思う

その中に毒が混じりこむ

親鸞聖人

「正像末和讃」悲嘆述懐讃

**悪性（あくしょう）さらにやめがたし 悪い本性はなかなか変わらないのであり
こころは蛇蝎（じゃかつ）のごとくなり それはあたかも蛇やさそりのようである
修善も雑毒なるゆゑに だからたとえどんなよい行いをしても煩惱の毒がまじっているので
虚仮（こけ）の行とぞなづけたる いつわりの行というものである**

親鸞聖人 / 「正像末和讃」 愚秃悲嘆述懐讃

◆古代より蛇（ヘビ）・蝎（サソリ）は人間からきらわれているようであるが、ヘビやサソリにとっては大変迷惑なことであって、ヘビやサソリがいつも人間に危害を加えようとしているのではない。

人間は自分のエゴでヘビやサソリを嫌い・卑しめているのであり、そこに人間の「煩惱」を見れないだろうか。もしかするとヘビやサソリの姿とは、私達人間の「煩惱の影」なのかもしれない。

しかし何故か、「蛇蝎」とは「煩惱の影」と共に、阿弥陀如来の光明に照射された人間の煩惱の影を食べんと、私達人間の前にわざわざ姿をあらわした「如来の使者」に思えてならない。

蛇蝎の如き人間を見つけることはやさしいが、蛇蝎の如き人間を、「如来の使者」として理解することはむずかしい。しかし理解しようとしてつとめねばならない。なぜなら、そういう自分が他人からきつと蛇蝎の如き人間と思われているからである。

出典（抜粋）：<https://jiganji.exblog.jp/19493989/>

◆『正像末和讃』は親鸞聖人 85 歳のご執筆です。約 10 年前に著された『浄土和讃』『高僧和讃』とは違い、説明的・解説的ではなく、厳しい言葉でご自身の本性を示されます。

その中でも 16 首ある『愚秃悲嘆述懐和讃』は、阿弥陀仏のはたらきを信受された聖人の人間観として、現代の私達にも厳しく迫ります。この和讃の前には



外儀（げぎ）のすがたはひとつとに

賢善（げんぜん）精進現ぜしむ

貪瞋（とんじん）・邪偽（じゃぎ）おほきゆゑ

奸詐（かんさ）ももはし身にみてり

（みなそれぞれ賢く善い行いに励んでいるかのように振る舞っているが、内心は貪りや怒り、いつわりばかりであり、その身には人を欺こうとする思いが満ちている）と示されます。

これらのご和讃は中国の善導大師の『観経疏（かんぎょうしよ）・散善義（さんぜんぎ）』をベースにされています。その文中に「蛇蝎」が出てきます。

『経にのたまはく、「一には至誠心（しじょうしん）」と。「至」とは真なり、「誠」とは実なり。一切衆生の身口意業所修の解行、かならずすべからく真実心のうちになすべきことを明かさんと欲す。外に賢善精進の相を現じ、内に虚仮を懐（いだ）くことを得ざれ。貪瞋・邪偽・奸詐百端にして、悪性侵（や）めがたく、事蛇蝎に同じきは、三業をすといへども名づけて雑毒の善となし、また虚仮の行と名づく。真実の業と名づけず』
雑毒の善とは、三毒の煩惱（貪・瞋・痴）をまじえた善。他者の目を意識してうわべを飾り、名利を意識して行う身口意の業を指します。虚仮とは、物事が虚妄であること、または内心と外相が相違している状態、すなわち真実でないことを言います。

引用：<http://www.yamano-koumyouji.or.jp/>

◆悪の中に毒が混じるというならわかりやすいが、親鸞は主著・教行信証においても「貪愛（とんない）の心」を毒とみなす。つまり、貪りと自己中心の心が、道徳的に善とされる行為の中に混じることを問題とする。

社会倫理上は助け合いが美德であるから、せめてお礼の一つでも言ってお返しをしないと世間が許さない。しかし「私が善をしてあげた」と当然のように感謝を要求されると、善を受けた方は重荷になり、貸し借りの関係が生じてしまう。

さらに、善い人だと信頼していた人に裏切られたり、勝手に期待したことが報われない場面にも出くわす。まさに「善」なるものが人を欺き、不信の毒が潜む。その根深いすがたを親鸞は「悪性」と言う。

これではどんなに善を修しても善は変質し、かえって悪の温床ともなりかねない。その虚しさを親鸞は「虚仮不実」と言って道徳の限界を見、人間の精神構造の中の容易ならぬ罪業性を見逃さなかった。

社会で本来奨励すべき善行が、我執や偽善性を増幅する危うさを考える時、悪人こそが救われるべき救済原理が求められる。どこまでも不純物を抱えた身であればこそ、雑毒の善を通じて、凶らいを超えた存在＝如来の願いが働きかけている。（文責：報恩寺 林 暁）